

食

卓

「親の小言と茄子の花は千にひとつ無駄もない」とは昔からよく言われたことでした。

しかしこのような言葉も死語になりつつあるようです。親と子供のコミュニケーションがこれない、会話が乏しい、このようなことが言られて久しくなります。

小言を言おうにもその場がなかつたり、時間がなかつたり、そんな時代です。その原因の一つには食卓がなくなつたことがあるのではないかと思います。「もつたいないから、ご飯を残すな、おかずもきれいに食べなさい、肘をつくな、こぼしたら拾つても食べなさい」このようなことを言われて育つている子供が、今少なくなつてているのではないかでしょうか。

立派な食卓テーブルはあつても家族が団欒しながら食卓を囲む風景がぞくくなつてきてはいませんか。夕方、どこ家庭からも聞かれた家族そろつての笑いながらの食卓風景が今は想像できにくくなっています。テレビが家庭に入り鎮座してから会話は少なくなり、家庭での個室化が進みますと、テレビでの共通の話題もなくなり、電話でさえも個々が持つようになりますと家族であつてもしつかりとプライバシーの名のもとに、言い換えれば勝手気ままが許されるようになります。食卓もおののが勝手に出来合いのモノを買って自分の好きなものを食べられるようになります。

そこに家族が共通のものを食べ、時間を共有しなくてすむようになっています。いつもペットボトルを持ち歩き、歩きながらファーストフードの食べ物を食べ、ところかまわずに飲んでいる現代っ子たちは家庭でどんな食卓を囲んでいるのでしょうか。夕方に学習塾に通い、母親はパート労働で夕食も作れず、ファミレスで深夜に家族そろつての食事も珍しいことではありませんね。父親は必死に会社にしがみついていなければならぬような時代でもあります。現実には家族そろつてということが難しいことなのかもしません。逆に健康食品に凝り、手間ひまかけて食事を作り、頭が良くなる野菜などを必死に作られる親もいますが、きっと子供にとつては息苦しく「気の毒になあ」などと想像してしまいます。(まあいらんお節介なかもしれませんが・・・)。二十四時間子供の時からいつでも食べられる食習慣を憶えさせられ、大人と同じ外食の濃い味を覚えさせられた子供が言う言葉は「疲れた」「眠い」「だるい」、大人と同じ言葉が小学生の子供から出てくるのです。何か大事なもの不失つてきているのかもしませんね。そういうえばお仏壇も家庭から姿を消しつつあります。

家族そろつて仏壇に手を合わせ、朝に礼拝タベに感謝なども見あたらなくなりました。他人様から何か頂いたときには必ずお仏壇に供え、仏様のおさがりものとして頂いたものでした。「バカバカしい」と言われそうですが、このようなことが今の私たちにこそ大切なことでないかと思います。親と子供の境界線が怪しくなつてきています。親と子供が同じモノを着たり食べたり、同じ携帯電話を持ち、子供も大人と同じような権利を主張しちよつと氣味が悪くなつてしまします。しかし親が小言を自分のためでなく子供のことのみを真剣に思うときに子供はいつか必ずわかってくれると思うのですが・・・。